



山紀聞
 第四

~10
 7381
 4



年山紀聞

茅

目録

後柏原院北御製

三々ひん

毛くちとま

屋はきうはき

勤臣

玉は考

白酒尾酒

天子法諱

蟻とほ



揚名分

〇とれをとの

なほし

〇谷とく

いな勢

のち漱

紫式部

吉凶前定

毛ねかの月



二十七日

○ 雄畧の皇后

○ 渚鳥

○ 多らたれ

○ うけらう花

○ 蝶夢集の序跋

○ 由旬

○ 隠岐直清

○ ねきねが河

○ くそぬく

○ 釋万葉集跋

○ 哀悼の歌

○ 穉世の歌

○ 山菅

○ 山多らたれ

○ 通茂公の哥

○ 今式歌れおのせ

○ 一里

○ 和漢同趣

○ 男房女房

○ 二禁

○ 大串元善碑

○ 孝子弥作

年山紀聞 第四

○ 後柏原院清繁

をらめしは我せいつくしと浪舟よは中流うけてゆくともうれ
かきまらに此時代は是利家お末よりして京都の強乱は
の懐起とていつくしと草のまはれはむのうし禁中をさへ
するまゝとてちく天子は多く清名のもてて哀周はむのし
にもおつりて世の中もも天子とり清名のたうとん
まおれ人のよきれおまらうとてれと傳道了名の一字は
眼目とてれ一筆はまてゆきある事なるつりつての天子
大樹より列島の大名をもちまてて此清名を産者の歌
とて天下國家を治めたるりて古農工高下のを



と云々

○揚名分

薩戒記定親日記 應永卅三年三月廿七日除目野今夜右府臨時

被申之文揚名分申文也件文云 被在常陸分

正六位上藤系朝臣國貞

望諸國揚名分

應永卅三年三月廿七日

廿九日記云揚名分事自院以葉室中納言被尋下之揚名分先
何任國并請文下丁注進名此事迷惑凡但山城上登上常
陸近江等之由見抄物此予大内記為清朝臣後日談曰上皇就
揚名分事被尋仰少幼之良賢入道常宗常宗注進六ヶ國其

時被教清不實云此事若以源氏物語之說可定一國之由

思召不令度中文字法云揚名分云依之清不實出本記云

或古人物記云天明寺開自見物加茂祭之山城分渡之中人

稱之為明寺殿被信云揚名分渡ニヤト被信人々之云後法使

為渡大略之時又同揚名分渡上ト被信了揚名分祓事也而云左

右山城使渡之時被信出急覺悟為令臨揚名分事後每度

被信云此時以某人等揚名分知山城分事云云

為章按多々に於長系此揚名分山城分上浪々一源氏

物語乃ハ何色之思と定めか右の諸國乃同なる處一信

物語をハ只あるしれ當書といはんをある小書教る云

○三ヶ國

夢の夢ふそのをけりかたのふらひよふしり君みねの
かこむむひて惟光めしてあはれつひかろふにあま
さふふあふらすのふまふしやと惟光秘のふまふつ
はうらふらふらふらとまわたらてりきはとふいふ
りあらんかたはまよにあらえとてふらぬ

河海抄にまね子の餅をふくかりこるおの餅ハ一とされハ
敷くハはよとてふらふら 契仲師うらとてふらぬ
はらあふとてふらふら 敷ハふく敷のおほまけりハ
らくとてふらはあふまのまね餅のお本かり一とふら
らかりまよのふまふらふら 紫れとの事ハ嫁娶のお式
らあふとてふらふらふらふらふらふらふらふらふら

はうらふて程使ふふむらたふらふらふらふらふら
はらふの物ハふらふらふらふらふらふらふらふらふら
云晋悼夫人食輿人之城杞若絳縣人或年長矣無子而往
與於食者與疑年使之年曰臣小人也不知紀年臣生之歲
正月甲子朔四百有四五甲子矣其季三之一也史記問諸朝
師曠曰魯叔仲惠伯會邾成子兼匡之歲也七十三年矣

○と乃かもの

赤深湯門家集にこもかふふらふらふらふらふらふら
はらふらふてふらふらふらふらふらふらふらふら
よやふらの朝乃ふら女島花うらふらふらふらふらふら

宿かやば麻さくあやま女あむいん福き依きかこいん
宇治拾遺は平貞文の本院侍従り局へ志のひくくあま
に新さきハ人あまてらるるれと案内アけんとて一のあま
ていねえれハ物乃らう一強よ火ほめかぶよりしてあめか物とあほ
一紅衣あきくうかけけたまひの志あくる山ほひき入てえぬ
られき

宿車物の事此おけり中書按おまゆりたりかどおて操りて
くまらとへ一そく救^{ヨキ}乃味するりまらる^キ改禁中より殿と
人の宿車とる名とまらる一たるれをへる感あるあくとれ
カおの代とつよよ後ハ京におまぬ人のゆりまらるり
はる〇ちとあめはなまのきんは

万十

吾門の急乃とめりつとむ百子鳥ちりハくれと君せきほさけ
浄釋云とつとむとと回者ほく通とれを疑てとむよあはら
又おろく扱ハ実城まらわてとむとつよや百子鳥ハまらおほ
きりり百子鳥とみ百子鳥ともあるふ回一百子鳥とつよの
名よられとつとみとつよ時百子鳥捨て子鳥とつよとむ
る一八雲の中お小當れとつ又扱実城くつと扱とほ進たるハ
号成百らとつと説小依て此教と思ふとつとられある
一首の言をせ七に号ハとつとけと君と君ととつとあるとあほ
〇たつとつと

万十
山口女王

お思つと人ふとととままといよ常にかりりるをわつ
浄教ハ奈麻強ハ愁乃字なり和修の言は生強也生と執

しくき物のまじり熟きぬよりつる初まりる波心なまよと意
 熟るとふ熟なり強ハをる波しよ越うらおかく強てるは
 ころるり今の俗流よ或ハちあなるもヤ熟るハをあくよ
 しく半^{ナカハ}ちるるまきり仮令あまよる寸に火の乳れをゆりも
 はやぬハ水よ母あは湯少とゆきましては後まやなる
 う愁よりけしハ世教の言思ハ故人よはしと志のひあくぬ
 ちあよまよみきとせりしハあまのひある半なりとあま
 の登けりたうゆき

玉雫の井川よりふりちあれと君我をきとけいばいありお
 清秋ニ云我位不ハ井川よふらせと君ハ心ありてさかか
 人るれハはまに回るまひつれとまよめはくあつりてを

曇り中けりきとなりちけしとあ恥しきなり俗は情あり
 人を登さし人としよち情ありて恥かよ人とつふなり美
 聚るる人をは人のうはくしめさうけく人としよつと
 志かるるを英業越うととと驚く訓してんたやけきまわ
 則^チ情ある事と思よハ誤なり古今に年のおりしむらうや
 一は竹を抽流よまけよまよみよの乃こまよむむあつと
 むり人夢やきしと源氏其本はしと今ハ志の今あり
 き人を流してりかけはくしあふとまよみよ人の流してそい
 りのしたまよみよ人ゆあけりつと是おまよむむあつと

○谷く

万葉集又山と信良令及感情長分中よ 天雲乃向ふも極

たよくく。さるるまきり

淨秋云第六に高橋虫麻呂とかくみするに谷潜タニクとまりん
を谷くまうて蝦カニルのまきかへるまのりける谷よともく
あそくねいひ名をおきたるるへ草クサをくるるをとして
鷄トリをかやく記といふめし延喜式第八祈年祝詞に谷蟻
結サツクル狭度極とある儀にたかまきと息もも後人の何やまれると
ちりあまをともたよくと長けり

○勤臣イソレノオム

天平勝宝元年に駿河守備原造赤人^{イノ}と初る姓也いふれお
むとよきし又徳^{トク}高^{タカ}録^{ロク}史^シにア^アく^くり東人ハ九經^{クニノミチ}通し
たる名儒と載さるるなり

○いかり勢

万葉第十六に吾と諾も下略
淨秋云法本^{ホウポ}のまきとくわと息と今按日本紀小碓とせとあり
あられいなるもせとよむへ後のふもいなりせといは
ふそきとよあり

○玉はりま

万葉第十六巻中乃歌^{タニハキカニムロノキナツメヲ}玉掃タマハキ薄カミ天本香棗アサメヲ前此
淨秋云玉掃ハ第二十に寶字二年正月二日内裏にて玉は
小玉帚と賜りて肆宴トヨノアカリあり々依^ヨ付^ツ家持の始ハジメ喜^{ヨシ}れ^レを^シり^シ
乃き山の玉帚とよめるに付て先達は是説まらるれと
今の歌并よ前に依るふ玉帚ハ草の名なりと云くはりは

者一石以二斗八升六合カムタケト為レ藁七斗一升四合レ為飯ハセ合ハセ六斗
各等分ニ為二甕コトニ甕得酒一斗七升八合五勺レ熟後以久佐本灰
三井ラ和合スレラ一甕ニ口方イサニ称フ黒貴クロキ其一甕ハ不和ハ是称ラ白貴シロキ
白酒是酒此制ハク作レきの灰ニ入るとレ道ハ行ハふレりての
名ナあり

○紫式部

今ハ昔物語ニ云今をむし越前守為時とてはえあり世々や
しかりりる人ハ紫式部ノ親ありけ為時源氏ハ仰りたるは
かろまるとの儀むすめにさかやせりきるとそお女院の文
此中をゆきてむすめ儀ありしゆりけお初ニきりし儀
内此お前園白飯ナといふことハ儀ニをレ所ニ分ルるレるニとレヤ

させ新ニく殿乃ハトはをむしきたるた今教スるニさせルるニあルるニま
そとハさハ好シひハれトやレそハ親ハむシひハるニさせルるニま
ひかり世々先つニくめテとハまニまニつニひハるニけレとハ式部ノ者
さまかハおめクたまトとハ仰リ出スるニ人ハおおニ儀ノ書ノ
庭ニまニまニつニくニやレ我レてハおハとハやレらハうハんハめト
ちけハくハそハ侍リたるハ源氏ハ侍リたるハ事ハさハ満ルふハ侍リるハ系
里ニ後ハ仰リたるハとハもハヤレ進ムるハ満ルるハん

為レ書ノ按ズるニ源氏物語の大綱ハ為時ノ仰りてハ満ルるハなるハ
事ハ式部ノかハせリといハ説クるハ又ハ孝ノのハりハとハつキはハ
つねハ下ノ人ハ侍リるハるハしハ甚ク其ハ言ハ儀ハるハにハさハとハま
よレハ思ハひハよハねルるハとハ決シてハ婦女ノ執向をハ侍リるハ

二系のほきま一人の筆をてハ筆をこはきぬるなり
一終よりてりてりてりてりてりてりてりてりてりてり
院のまきををゆきてむすめ城たりてりてりてりてり
院の三字の后乃まきといふまき字のちまきなりなり
かて内の法ありはまきまきまきまきまきまきまき
乃し式部ありはまきまきまきまきまきまきまき
おつにまきまきまきまきまきまきまきまきまき
しる人ありてりてりてりてりてりてりてりてり
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
たるハお後の文ふよかまきまきまきまきまきまき
紫日記とてりてりてりてりてりてりてりてりてり

いりのゆりて源氏の式部一もふ出てあれは氣あてハ
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
たるまきまきまきまきまきまきまきまきまき
よまきまきまきまきまきまきまきまきまき

○天子此法諱

台記長公日記 久安三年六月十八日云法皇諱及我朝古事
法皇好見古記 仰云後二系院法名人不知之不見日記朕獨知之
明我朝旧事 又仰云我朝天子出家時法名多是三字確誤所行
金剛新申 乙久余奏云何知誤乎仰云寛平法皇法名空理灌頂号金剛
覺灌頂時名灌頂後清消息奥猶書空理不書金剛覺則
知僧灌頂号猶男字而古賢以為金剛覺是法名不知有空理

之律律是故天子法律三字又_二金剛之字_一雅古賢不免失誤
依知此事朕名空覺也

按法皇_ハ為羽院_律事也

○吉凶前小定体

と云ふ所の卜珮と郭璞と姉_りるか_ら妙に易学小通_りを
く_りて_り侍_りある時郭璞は_く卜珮を_てて_るに_かき
ら寸兵厄をまぬれ_ると_り卜珮_くく_る吾_ハ十一_歳して大
將軍となりて禍_をうけて死ぬへし_を好_むに_もま_る終_をよ_る
まり_し郭璞_くく_る吾_ハと_いハ江_をあ_るて_ると_いは_る後_は
多_りて卜珮ハ劉聰_く大將_となりて軍に_まけて_死ぬ郭璞_ハ
敦_くを_あに_殺されたり

今按此二人易道_ハく_るを_志て_る身_の吉凶_をく_るか_らせ_る
は_るその禍_をさ_る体用_をも_とま_るゆ_るを_通に_さけ_る
は_る運_を数_でく_るは_るく_るお_の生_死禍_福を_一定_る乃_は数
あり或_ハ子_にお_のれ妻_を別_{して}思_ひを_胸よ_おく_るは_る
は_る主人_{より}身_をけ_るは_る城_をた_りて流_浪人_となり或_ハ
高_貴を_利を_失ひて貧_困の_なけ_な城_をく_るは_るか_ら生_るか
ま_りの苦_患は_るく_るなる_も皆_一定_の数_とあり_しあ_るく_るて
る_けき_は成_をは_るく_るは_る半_{なり}

○蟻とほし

狼_邪代_碎編_いく_る小説_云孔子_得九_曲珠_欲穿_不得_遇二_女教_以
塗_脂於_線使_蟻通_穿

本朝よりありとほりの故事ハ此小説をかくりうのきりじや

○そのほかの目

正徳三年の八月十五夜小石川の藩邸へ養仙院君つゝきむひ
あるに 王公は清詠

あふひ三日月と波をまをりしと

養仙院の君問き侍りてり後とみに賞したまは庭のきり

きりともをりしと波をまをりしと

えともをりしと

及三位綱條

秋をたすのは月をのりつる乃あふひしと

君のむさかりと

そくてくはなつた

今按養仙君とてりは八重指君とて憲廟乃は女故中將君
吉孚は清室に多ま王公の清より君より寶永六年の冬也やも
りふするをむひてよりな殿をけりて部中山の山殿小を侍せたまふ

○雄略天皇皇后

此帝首城山に狩獵したまふ時嗔措ありて草乃中より暴よ出て
人を追ふ獵後みま思ふて或は樹小れりけりをさりぬ天皇舎人
某に詔して乃ましく猛獸とて人も人ふ違てハ憚る汝逆射るか
は刺殺とあつるにその舎人懦弱て樹小れりてみ成りし人ハ味
狂直小ありて天皇に向ふて噬奉らんといふ天皇わくより勇壯まを
まーくれを弓を以て刺止め脚をたけて踏殺給へりはくかの舎人を

斬^きじつ^し玉^ぎ小^こ成^ぢ皇后^{ごう} 幡^{ばん}校^{がう} 誅^{しつ}て乃^{のち}はら^らく 澄^き下^か田^た獵^りを樂^{たの}しむ

ふ^らら^らよ^から^らる^るよ^から^らる^るよ^から^らる^る 況^{きやう}や^や嗔^{ちん}怒^どは^はな^なを^をひ^ひく^く人^{にん}成^ぢ殺^{ころ}した^まま^まは^は怒^{いか}愛^{あい}なき^き心^{こころ}ち^ちち^ちと^と天^{てん}皇^{こう}を^を如^{ごと}く^くら^ら皇^{こう}后^{ごう}と^と共^{とも}小^こ成^ぢ車^{ぐるま}小^こより^りて 悔^{くわい}り^りた^たま^まひ^ひは^はく^く万^{ばん}葉^{えつ}と^と呼^{よび}て^て人^{にん}を^を皆^{みな}禽^{けい}獸^{じゆ}を^を以^{もつ}て^て以^{もつ}て^て朕^{わが}ハ^ハ善^{ぜん}云^い成^ぢ獵^り 以^{もつ}て^てと^と後^ご志^しを^を玉^ぎ小^こ 日^{にっ}本^{ぽん}紀^き雄^{ゆう}畧^{りやく}紀^き不^ふ足^たら^らず^ずと^とす

今^{いま}按^{あん}此^{こゝ}皇^{こう}后^{ごう}の^の評^{へう}誅^{しつ}云^いハ^ハは^はら^らく^く小^こ賢^{けん}后^{ごう}と^となり^りし^し 雄^{ゆう}略^{りやく}も^もま^ます^す勇^{ゆう} 傑^{けつ}乃^{のち}う^うい^いあり^りて^てを^をく^く誅^{しつ}云^い成^ぢ用^{もち}いた^たま^まふ^ふ後^ご世^{せい}人^{にん}君^{きみ}の^のま^まね^ねひ さ^さ勢^{せい}と^とま^まふ^ふ乃^{のち}又^{また}美^み事^{こと}な^なら^らず^ずなり

○ 辞世に教

天^{てん}正^{せい}八^{はち}年^{ねん}播^は州^{しゅう}東^{とう}郡^{ぐん}乃^{のち}古^こ護^ご三^{さん}本^{ぽん}の^の城^{じやう}主^{しゆ}別^{べつ}所^{しよ}小^こ三^{さん}郎^{らう}長^{ちやう}治^ぢ舍^{しゃ}才^{さい}彦^{げん} 進^{しん}友^{ゆう}之^の伯^{はく}父^ふ山^{さん}城^{じやう}守^{しゆ}賀^が相^{さう}等^{とう}秀^{しゆ}吉^{きち}公^{こう}と^と防^{ぼう}戰^{せん}を^をい^いは^はら^らう^うか^かは^は苑^{えん}

城^{じやう}一^{いつ}法^{ぽう}卒^{そつ}の^の舍^{しゃ}以^{もつ}て^て玉^ぎ小^こけ^けて^て之^の所^{しよ}か^から^ら切^き腹^{ふく}ぎ^ぎん^ん事^{こと}を^を秀^{しゆ}吉^{きち}に^に約^{やく}し^し共^{とも} 小^こ妻^{さい}子^しを^を殺^{ころ}して^て自^{みづか}殺^{ころ}し^しぬ^ぬ 城^{じやう}中^{ちゆう}より^{より}舍^{しゃ}以^{もつ}て^て玉^ぎ小^こけ^けて^て出^でる^るを^を の^のか^かは^は辞^じ世^{せい}の^の事^{こと}を^をい^いは^はら^らう^うか^かは^は人^{にん}の^の志^しめ^めを^を体^{たい}

長治

今^{いま}ハ^ハま^まう^う恨^{をん}も^もあ^あら^らぬ^ぬ 法^{ぽう}徒^た人^{にん}乃^{のち}舍^{しゃ}より^{より}か^かを^を体^{たい}成^ぢ身^みと^とか^かり^りけ^け 乃^{のち}玉^ぎ小^こけ^けて^て出^でる^るを^をい^いは^はら^らう^うか^かは^は長^{ちやう}治^ぢ妻^{さい}

乃^{のち}玉^ぎ小^こけ^けて^て出^でる^るを^をい^いは^はら^らう^うか^かは^は友^{ゆう}之^の 友^{ゆう}之^の 命^{いのち}を^を玉^ぎ小^こけ^けて^て出^でる^るを^をい^いは^はら^らう^うか^かは^は乃^{のち}代^{だい}ま^ます^す農^{のう}多^た成^ぢか^かり^りて^て出^でる^るを^をい^いは^はら^らう^うか^かは^は友^{ゆう}之^の妻^{さい}

乃^{のち}玉^ぎ小^こけ^けて^て出^でる^るを^をい^いは^はら^らう^うか^かは^は乃^{のち}代^{だい}ま^ます^す農^{のう}多^た成^ぢか^かり^りて^て出^でる^るを^をい^いは^はら^らう^うか^かは^は友^{ゆう}之^の妻^{さい}

乃^{のち}玉^ぎ小^こけ^けて^て出^でる^るを^をい^いは^はら^らう^うか^かは^は乃^{のち}代^{だい}ま^ます^す農^{のう}多^た成^ぢか^かり^りて^て出^でる^るを^をい^いは^はら^らう^うか^かは^は友^{ゆう}之^の妻^{さい}

賀相妻

後の世は道もはよりしおとこし子成我身にとて引未れそ
三宅服入る治忠ハ長治ウ家臣少テ殉死キリニ

君ウハウ此身の命何そん終てかひのあふ世ウリとそ

又

天正十一年四月秀吉公小國小起き柴田修理亮勝家を攻むし
時勝家一りの良將ありしかとも防戦利をうり多して同廿日此取
ととち志こし女房以申城一所小しあ門め
て今生名跡の洒妻を奪し夜ふけぬまは勝家夫婦志こく
国よ入く婦人よむうひつとこいお内府公 信長乃弟妹るれ秀吉
そまきけちるる一明新此城より出さ度ひて恙なくおとけよと

再三いさ免れれと婦人の後よりに死んち城ちきりて何れ
とかるよお酒の折あり杜鵑の夢成ゆて

小谷清方 信長公妹

けぬたよおぬるほくとち門の板れ夢ち証さよ山ふとま

返

夏れよの夢ちけはるま文院の名をと雲井よ何そよら居る
ゆの廿日婦人をはし教し勝家切腹して中村文信といふ
乃よ首伐うとや又荷もなうとそ方にく自害しぬ文者
ふにうく

思ふとち打けせつとち引り重志るるや死出のやるわとま
たれ二件と察友お大串平の命元善うお借り秀吉送る

にせりしとせし三本柴田城をとりて死し婦人もいそしく
まのまにかると治忠文高主人小従て切腹みふ嘉雄の氣
象おのひるるにささやうなりや成さくはれうのいふまに
そるはたきりしうかくとゆる

○渚島

万系舟七ふ人し
はしつこの渚乃ととり流るそははしつしたてて舟ふあつても
渚叙云舟方の渚ハ伴勢也流るは八雲山お小海洲也と流るは
せりよハ何身れなるまれ洲小居るさうや今接舟十一小大渚乃
荒破の流るるとよみするに又とほくわる洲小なる舟ももさ
ゆはりし流るもよみするゆれハ流るるとはとほくわるゆのうさゆ毛
詩云開し鴨嶋在河之洲今此舟小はまうひたててとりしと

けつふうねんるれ

○山菅

和名山菅云本草曰麥門冬和名夜未汲渚叙云瑠璃れ名して山菅乃
大きなる山菅のたふり万系舟七と妹とあめ愛れ実とりに
ゆいよと山菅まうして此日菅いといふを山菅菅はあ
よみ文字山菅ヤニスケもまらハかると山菅門冬といふまらぬ
て只山菅生る菅なるなり

○多らりれ

万系舟十八天平感寶元年同六月廿二日大伴家持乃櫓の
長舟にかまはくもりやにかきしよめ流るれ神のた
不濟せふ田道守常世ふり下畧

淨教云和名抄曰檣一名金衣和名大知波奈南方草木状下云白華赤實皮馨香有美味と抄此檣と云今乃世は蜜柑と名付味菓なり俗にたらしむるといふを柑子に似ておぼく皮のいろ黄ふしてあからし味と少酸くして苦きれハ英味なりといふ凡檣と柑も詳くかゝらうらわさうへしスメロキ 皇祚の祿は垂仁天皇たり

○山たれをね

万葉集四春日王 河川の山檣乃多ふ出くかゝらうらわさうへしといふも淨教云山檣ハ言麋抄云世俗小庭ハ柑子といふ物也數り此の時山菱小くく味草なり 今按此集にいまもある中に實七奇州奇州中にある六州少と云たり法華御書に本はといふ

中又山檣とあはれおぼくはなり 近世式迄酒式の大嘗と云神代物此注又云弓弦葉 寄生 真前草 日陰 山孫組 山檣子 袁等賣草 各二種といひ實の珊瑚の如くなる物なれハ多し出くといふ及又寄ふおけく古今に友則おけり山檣乃の多ふ出くといふあり ○うけらう花

万葉集四春日王 山たれをねと云くは武蔵乃うけか花乃多ふ法をゆえ淨教云紅白いさくはれとく或ハ色くハ紅字家良ハをけらみく白木なり和名抄云尔雅注云木儲律及和名手ぬ良云本草綱目云夏用花紫碧色 又云莖端生花淡紫碧紅 數色とかくおぼく花の咲そのたれを花れとくゆめく及又出くといふいまも也後於於此也今にうけらう花の咲たりといふきれと云のい

きつよき 是は万葉にうけう花とよめはあきも城ひきまぬ
とよめならぬをぬめを此書にうけう花とよめあきもあふ
出る城かりてよ如くあふ出たともありお孝の徳説もはまたら
履ぬくぬぬをえくは 為章按もるに古人の万葉をえり
をい法とせしきりしあふかえりの徳りあはくその徳も城又う
まはまたてあきに胡礼なることらうこん白然り後新たとの何
をまり城うけてうきう花ひらぬうにともとをぬき入るはし

○通茂公の歌

薄郎の侍 醫板垣法橋 真庵を系昨へよき 時幸に百人一首
和方れ講義を中院通茂公へうけきあたり侍にうみてたよいき
方



おくまきもたふなきの杯んよをうらう

くくねいはい道もはよたう

○蝶夢集の序跋 西山公の侍女 左近局れ集也

むし紫れ君のぬ板の品定に女の是は志と雅きまき
かこもあるかるとまいてかこたう志の志れくまきまき
おふよふめ十思乃うらあられ人のうへ城むしあかたりはう
ゆいあをうへとなしいゆい免とろときり又かれ日記よはきくそら
世にあふし女とらうのまは成志うたる城みるに物終と同一おあひま
ふて帰徳ゆいけさ人のこと系なるゆいゆいよはえ城りてい
はふるま梅小菊にゆる香をたえ免てあふよほり香成志乃く
れはあふとす歌ふ似あういてやその城くよかあらん女の大

若くはあつたをたつねをきこり出侍りまゝ一人村と長治
 ぬのあはまはれてかこちおん世の人よはらまはりたるまゝの
 中記乃はより近衛殿下信尋公乃様は清新おる也
 泰姫君はさるさるいしをたまよまきうひなりて義公より今の
 ま公ふはるさる久し記み屋はくのはとかまりな人乃やうら
 ひよはるいみをとたはる紫のいひまむいさく秘らけはし
 きおろえなくひとよりのまめ屋ふ志のうなるおのむき成
 事のをたつふ乃と屋にされさかしく人をたまにるさるおも
 ふくひまひひまひいけくはるさるいさくさるさるはる
 おくのありはまふ志さかひまてよらひの事さるさるかよら
 よりいむをたまはるきよりけるさる志のひゆるさか
 義公と

姫君の清かるとむくけぬさあひうけりせむいつおんは
 けふのりき終中なるひてりさるれさるはもあひたさ
 いみ經三史乃るくはるみさるさるの屋はるのあはるを
 たさるか記そのかくともさるへ屋乃はるれさるさるは
 屋ふまねひまられさる女のそれさるさるさるさるさる
 るはるさるけさるはるさるさるさるさるさるさるさる
 からあやはさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる
 なかのことさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる
 人よとさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる
 房をとさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる
 いさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる

きほとのうのいのみなるけしとたせくもつひあつしんが
けつひあふまのり身あれどうん致さるもよみゆくまらる口
とほをさもみほかきしとれ道なりと思ひけらあやあは
かその取りましくはまらなりすくらけしかを身けららよあせ
はいふ次いとすくねくあつ川かふ二百六十余をなまともみ六
篇を獅子村の時長等拾ひそのして心の花よぬる蝶の夢と
いふ方乃と家をもりて集ふ名付あよひあおよけん致志
かくあつしてよとねくまはもるう雜波津のうしつしをりてどかく
ふなんそのほおむをあさあるうへ行しかきふなまよとたしを
あねはらちを飾りてまき年ららるりしつとらる婦徳乃ま
色りもあんはくまけハ学人なありといふ海の水乃ほふとかる

正徳の徳りくして友聖ゆききかめきのみやかま争のほこ
形を城のすくもれたるし

ゆら系乃きり章

集中れ歌乃うらそくくん流書巻

三十の年れえ日

さく身り春もまのてふくさくふとらるらにかるまう流さ
子乃白小人くさきひて信樂園より入て

山里乃花紙 今據此里ハ歌江
市別所あり

あつれも流さかきん山里にひとりなるむら花の下を

橋童

梅娘乃さひをうられ河波りりえて雲の糸身みくらん

白蓮を

白妙ををらまらうとの露れまをを記しんあらしもかき

落

我宿の一ひらききほよいてたのせもねうね詩まねくらん

秋乃うらたを

萩乃露ををねのりたを鳴てえ路もゆきと秋のうられさ

朝霧

吹まよる露をうら風をうらて志のふしよけさの初霧

曉別恋

小夜衣なふらにまきん志のりた鳴るもひき名詩ありと

述懐

かくて世よソのまて草れつとねくつれをね又歌ををきん
求むとあけつハかきよせ乃中ふたきしひきんそれほねき
落すまよ草の庵乃かりのせよ志りの夢をかけうらねん
姊かりくる人のむすめは昔ひて菟永大蔵えせのねー

に先づをせけるうらねくなりしは

祢きこし今ハあつたれ露の身れ消てかくぬ世のなをひま

年は産禪なとけりりけるう時

思ふととねのりねととちりねいさひ乃かうおまひ入ぬ

水戸へわるとてを忍とつみあ乃松原よく

らよりぬる天乃の御蔭うらなれて雲乃赤やなうねう乃松

岩の形入寺にまゝして竹の小松陰の岩を先づりて
清水れなる新をあらへ此上人漢兼上人の流と名はを
たふしりりてまひかへ

松より文後巻流乃志多及子代をわけあや結ひかゝらん
流轉生死乃意心

吹風ふちるかえれを又そおくまう好や六の乃志を乃流
くまひう浮世の中にまゝ小僧んかゝぬ道の師なりとかる
上品と生乃心を

ま守鏡むく心のまことより佛乃かまはうのまきりりあ

辞世

今按正徳二年壬辰七月二十三日卒七十二歳
法名備之静大真尼

又も来ん人をらひくえぬわらわら苦しくたえほなくとと

跋

閨閣才子世必並稱清紫其紫優於清蓋吕才不浮于德也古之
婦人不吕才称吕德称及漢班婕妤好曹大家輩始吕才顯而德亦媿
焉魏晉流漓於有辛憲英明敏端慧豫料成敗若蔡文姬流君子
不取焉丈夫才德兼備者丈夫且難矧在婦人乎苟或有之希世而一
見若一靜者其殆庶哉乎典壹圍三十餘年内人咸懷其惠婉慤
貞淑頗通書史所詠倭歌不下一千首晚年悉焚其稿止留三百五
十餘首間作詩亦焚之所留和歌必其可傳者而所焚未必皆不可傳
者取舍之嚴毅然不顧而處身範物操守之篤益可知矣友人安藤為
章釐正成卷題曰蝶夢集叙其才德徵吕紫娘之言可謂擬於
其倫者也余久忝迎侍熟知其為人雖列之於古之婦女良之所

法號ハ淨心院霞屋妙仲真尼トシ牌位をすまひら玉蔵院ハ
安堂トシゆりねを初めの戒師トシ北野西雲寺の開山ハ性坊阿闍
梨きと云ふなりけり此中子智玄律師ハゆりゆり殊勝念佛者トシ
俗縁と云ふに王女を例と云ひ居て淨土の法文をいひゆりゆり
いふよりと云ふほくそを佛ト云ふ人と言ふに呼ぶゆりゆり時目と
いふきふあきま

あつはらん世のおれまみふりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ことわりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
後小中院内府通茂公通茂ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
乃と云ふゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

母をばはもたふゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
通茂公于時大ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

此集上下巻山田氏龜子法号淨心院霞屋妙仲真尼所詠和
哥也真匠従少好教時紀三代集讀源氏校衣等曾侍于
本院仙院彼石今式部局長子右衛尉為實編集請於題名
予曰彼仙院賜稱可謂後代美談也因名今式部家集云
延寶乙卯季春 通茂

集にの終るる前九首本院小督の局れ尼ふたりて小孫よおとたる
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

澤若菜

妻もあはれあきばあはれうきとほりとしほ白かけふつゆをそつむ

月乃赤梅

かきむねの月城のうれき袖のよふとうきとほりふ風の梅の香

夕月夜がさかしのうれき雲はよりはをたをれるさうき

夕立の色はをくなく蟬のさきもよきとほりふ乃下か針

名月一おふ月のかつた秋下風ふさしひ乃きさるうれ雲も如し

あはれいよ色かきよあはれさしたるむ秋の色を月にとけや

秋夕

あはれをそおりのあはれさうれ夕はくささほりさかく秋さかき

あまに多くて志のよき妻のあけ消ささうきとほりふ乃きあはれ

秋夕

あはれをそおりのあはれさうれ夕はくささほりさかく秋さかき

あまに多くて志のよき妻のあけ消ささうきとほりふ乃きあはれ

秋夕

あはれをそおりのあはれさうれ夕はくささほりさかく秋さかき

あまに多くて志のよき妻のあけ消ささうきとほりふ乃きあはれ

あはれをそおりのあはれさうれ夕はくささほりさかく秋さかき

あまに多くて志のよき妻のあけ消ささうきとほりふ乃きあはれ

あはれをそおりのあはれさうれ夕はくささほりさかく秋さかき

あまに多くて志のよき妻のあけ消ささうきとほりふ乃きあはれ

あはれをそおりのあはれさうれ夕はくささほりさかく秋さかき

あまに多くて志のよき妻のあけ消ささうきとほりふ乃きあはれ

あはれをそおりのあはれさうれ夕はくささほりさかく秋さかき

才裁我欲四時携酒去莫教一日不花用モこれハ和漢をこから人
ハ之後を居てた身とく似るれ奇きり

○朽きたが河

系系才甘よほりる於ヲキナカカ我河ハもこれと云

陸親云小段多ハカキ階ノ息者たれ息者河ハオキナカけり源氏

の江又連方取れ後ノ溪の中を指てなれ入る河とゆたハ深

く考らね僻りするナ我とかけの候名小も心以有ハ又日本紀の

天武紀と云も息者横河と云り近江の坂田郡ヨリ

○男房 女房

小右記永観三年四月晦日清彦記ハ十歳令賜男房十歳給女
房と云り盛衰記小也男房と云り是ハの例によ

至て少也 西山公先多太田郷久昌寺に和奇技梅とこれ

きたる時女の能少而女房男房と云男房と云傷病のを傷房

と標と云ハ命と云ハ

○くせぬく

かき後小日記道經母の日記 六月五日云く此吉候ハ老法く多なる

ほくまのむくありくくをにかりわする如といハハ

と云候うちかきりて二丁急三急ゆえくるハ身に志きてをり

又

明恵上人の教

山寺ハ法味くくして居るかこれ心きくはくやふもすて後

今按くやふハカマ廁なと云ハ

流亞也 義公知其能善遇之屢使京師購求遺書使于長崎
與清人張斐接斐稱其才元祿九年 鳳山公擢為近侍掌
編修事素尪羸多病至是增劇不能視事以十二月十二日終年不
滿強仕一歲矣妻森氏生一女葬豐島郡谷中御養泉教寺從其
志也嗚呼居士有經濟之具而不見於施為有博洽之才而未及其
底蘊接人和煦溫醇謙遜寡言知與不知皆悅慕之而制行
端方有毅然不可奪之操家道轉軻雖得於君而貧病乘除
無年無子也躬耶通耶銘曰 平治八年甲午 安藤為章

才不勝德命胡不滅惟其卓乎者立是以久而彌彰
大井廣貞 建 安藤為章

正德四年甲午 水戸府下士

安積覺撰

雪蘭子人品於世也乃碑文小足く有りる元祿二
為章と同く京上して一と号の位を門さひ侍り今此
小石河よりす海わくおくその墓代訪ひ侍り妻と一女と
を金く死したるハ碑と多門る人も那く後ハ亡廢せん
をアるに忍ひを相隣子 大井介唐門廣貞居士の次奉
少く彰考館に總裁なり といふ
と也侍るを安積覺本林尚誦加藤宗伯代本之大夫盡矢野
長九郎重好中嶋平治為貞なとめてみ形むる居士と志
志く交り多る朋友方ハおろく助力して碑石成就し
な不牌位をも養泉寺に安置して永く冥福を修し

清く事ふをりぬ

○哀悼此教

元禄十三年十二月廿日 西山公薨りたまふ事京師へもて
 中へえゆりまゝに清く言ふ大勲之実業卿なり此舊記教書の
 事ふて中へかきせたまひたれん為章々許へたせ下されり
 中ふそれ子に居るもの清くおとけく神へかきてまじり
 たり世まて清く志しりぬ行事を正き伝道者なりたまひ清く
 伏見宮邦永親王の侍姫繁子ハ元禄帝の女清く入内なり
 かりしをあらうてその後やとゆりたれん永く深意おき
 清くて学問和弄にのり清心をとりまはせたり一為実為
 章々日此乃物作伝 西山公少きを傳ひあはれり

清くとも伝多しく清くせらりて遍小のりききものに訪
 ひしきせれよを姫君ととこれ伝きしゆふおほしきる小此
 訃音をすしきりて右衛門督乃局して仰せ下はりし出
 常陸の権中納言源乃のりむす此玉の西へりしとて清く
 ともかきくぬりたりしひねるる一伝きして

七そちや三少をれ夢成をりし清くおほくもたれりゆりか
 ちようはと十首へりし出路中かきせし清くゆかりし歌を
 まりけてよみて清りたまふ

時雨

前大納言通茂

雲と今消しを回し七十はを乃たりとせまきくた志く清く

落系

冬儀實際

うく時とありし子種のりし花系をけりし習とらふと嵐の如

寒草

前中納言通躬

野色の及れ秋も子種とけりしと今更とて志れ小竹の冬が如

冬月

左中將通清

又たもけん人も志しかなき所との月や時雨はけりし

歳暮

左中將実岑

仍年乃名姓はそへて志しかなき所との神の志み

述懐

左中將定基

恨あきや心の友とをけりし身は又とけりしあきとる

世相はハみまぢりし志務の如許信じて
アハハセたまひて伊勢面ハハミとなりし

懐舊

前中納言實種

未とけりか終りの名ハとじともあつぬ水のらづれ世の中

侍奉

頭兵輝光

さう形な時々のとくもあつぬあつれ一板乃夢れ世の中

無常

右中將有慶

あけくれぬあつれ志れとあつぬあつれもついの夢れ世の中

秋教

前大納言実業

志れふとよあつれ林のつみへもあつぬあつれ乃本くは志れ

此分諸方より追悼乃待教文章に門めて一大冊なり哀挽

録録と名付たるを過り癸未の十一月三十日小石門より乃

大火小焼ゆりぬるふらあつれえをるをかりをとりたふはは

船橋式部少輔清原經賢ハありて先妻出家して志言宗と
なり常覺と名けり自息朝と号しゆり親き女
阿曾ハ家兄為実の水戸の家ノ書ハそふ哉 西山公
きち一先して扶助し好ひおし清原居よありて西へ
のかしひ人かりしハ覺去の明る書清墓よりてに梅花
を子伝ふとて

咲ちま川流ふかさをる梅の花おりね山ふま向はるか
麻呂郡宮田郷岩船山教入寺惠明院如晴上人を本教寺常如
上人の才ありしを延寶に始まねかをむいていと志
よりて解し終ふ覺去の後雪のふる日ハ暮はうてと
小野山や雪婦とてけて君をえりありし哉苔は下にふり

三の教まとりね君うりたはむいよの月やてはむ
豊くはふりし乃志りてつこりに

中山備前守信敏 藤府第一ノ補相なり

今日とてを流る月日となふ彩を志ふおりのいづきねま
西山の心跡ハまうりするにいつか人けしをなく朝も
松のこはむとてたてりけしハ

市川味禪翁 三友法門弘道入

君まはて今をさ清うね乃松ひりや代の春るる如し
源好正 肥田十左

初よりしはけり此山乃いひそれま君うりやを松はれりて
藤原忠顕 萩まふ希

幾とせうあふふ恵の露成今袖のたをうたそく志存る

清原長秀 校本ニナ

誓一少成おりの志門りてやまきこ袖うもらもそあけり

藤原治之 岡見治平

誰志一招とどらむ西のや雲かたれゆく門よりかき

有間治部少輔光近ハ廣橋儀同三司兼賢公の孫方り侍

宮親王少侍て為実為章とはくかろの屋に交り侍

々々致侍して素朴居士と号一京師塔殿よすはわし

と一此由急ありて由恩顧りのきり此訃音とゆつてよみて

おくりゆりけふ

いふらんたけまのりては志の思ひ成るた袖のひ

口方人あつたけよき一為山乃たうまはよわなうしかき
子代すそと誰も心成はくそねのよけくあううや世れ中

○孝子彌作

常陸の玉乃方郡玉造村よ弥作と子民あり生れは実や

かよて母よつて至孝なり母に田耆方々ハ備力^{ひんたて}せて

たひたるを扱ふと衣衾^{みすゆ}をけしハ母のまじま成かたみて

弥作ききある物を脱^{ぬき}て母よおろよ母りあつたははむか

ん事成らふて多ういふはい母のこゑにまじく

をとおしてりこのうらたて母のよく眠るる成かひ

てをながよおほひきやてあははくはくはくはくはくはく

も其うさうにぬぬぬぬぬハが火をたきて母成り

たゞめ泳作ハ火をほりりなりかゝ居ぬありまゝなり人よ
 屋とつせを〜ハ役おはきく他ふ出る時とせむむひ乃家
 にゆきて母城かつりるひねり〜とてなみ〜とてあはれは
 出たりまは〜焼飯して午ひらひ餐ひらひより〜ハ心もうらやま
 てふ〜とらよひとてむひの人のため〜とて〜とてわ〜
 ら〜とて夕けりハあよりてゆり母〜とておのれを
 々々まゝ酒の手せ或ハまら〜とて〜とて〜とて
 せり〜とてひ乃とせける母時〜頭痛の病と〜とて〜とて
 化此のま〜とて枕よあ〜とて枕よす〜とて〜とて
 御〜きり母奥肉浅木のし時ハ泳作ちかよふ色に〜とて
 何ふ〜もあきりぬ〜とて味を〜とて〜とてめけるお〜とて

は母母ふ〜とて飲食とハ泳作を〜とてまは物の〜とて
 ち〜とておの身は〜とてあ〜とて〜とて
 々々母〜とて乃法義とすゆり〜とて或ハ〜とて
 方〜ゆ〜とて〜とて泳作と〜とて腰を〜とて背せ中ちゆう負おけと
 志〜母の面白〜とておぼろ〜とて泳作十歳
 に及よ〜とてか〜とて〜とて〜とて〜とて
 しいあひねり〜とて人よ〜とて〜とて思ひを
 了〜とて延寶二に年 西山公清在在隱いん居ぐをり姉あねたよ〜とて
 造〜とて〜とて〜とて〜とて清漢賞しやうのたまり
 水馬みづうまのちに〜とて田畠たは英えい全ぜんなと切きひつ清感しやうかん法ほつか
 たりそれより家の内も〜とてゆ〜とてかよなりて〜とて孝志きやうしとら〜と

志く同しき八年、母身病り、其時、奴婢をたれ、み
 法、醫師の方へ行つて、も、取り、病、癒、す、は、
 なく、志を、は、く、す、出、法、の、か、る、み、他、人、の、な、ま、
 勢、り、を、後、小、妻、と、む、て、農、業、を、つ、と、免、れ、を、ほ、く、富
 さ、け、る、は、を、も、ろ、と、母、の、世、に、ま、り、時、り、行、く、傳、か、
 よ、海、を、い、た、す、は、ま、り、の、城、と、て、や、り、お、ま、り、元、禄、七、
 甲、戌、小、六、十、歳、な、す、世、は、お、と、も、い、傳、く、と、
 今、按、中、村、新、八、希、願、言、遺、文、及、中、小、孫、他、傳、一、篇、あり、為、章
 今、何、つ、つ、至、り、る、に、先、考、先、妣、乃、在、世、の、時、に、
 孝、志、を、も、は、く、さ、り、なん、と、を、能、く、行、く、事、を、
 何、れ、に、さ、も、以、願、き、孫、他、心、操、は、お、と、り、傳、く、ん、か、し

今や神主と拜して膳をそめ、香をたよ、おたけい、
 とかひたり、父母の、人、れ、れ、城、よ、み、ま、り、其、生
 前、よ、と、願、く、孝、行、を、は、く、す、後、の、悔、何、
 益、く、傳、く、ん

